

37 蘇頌と『図経本草』

王 少 麗

中国本草学は中国医薬学の一つの重要な組成部をなすだけではなく、世界医薬学においても重要な地位を持つ。本草学の著作には現存する最も早い漢時代の『神農本草經』から影響が強い明時代の『本草綱目』まで多くの人々に知られている。しかし、本草学の重要著作の一つとしての『図経本草』及び作者の蘇頌を知る人は余り多くない。現在も教材として使われている『中国医学史』は膨大な記述がある本だが、その中には蘇頌と『図経本草』についての話は僅か数行しかなかった。一九九一年ごろから学者達によって『証類本草』と『宋史・蘇頌伝』等の著作より少しづつ蘇頌と『図経本草』が判明された。そこで、この機会を利用して、日本の医史学会の方々に蘇頌と『図経本草』を紹介したいと思う。

蘇頌（公元一〇一九—一一〇二）は、字を子容と言い、泉州（現福建省泉州市）に生まれ、後に丹陽（現江蘇省）に移住した。宋時代の四朝の多種類の官職に任せられ、職位は丞相に至った。医薬学だけではなく、文学、哲学、天文学、地理学などにもことごとく通曉し、正直で正しく節操があり、当時の人々にかなり敬愛された人物であった。彼は本草著作を校正したときに、当時の本草図経は実際の臨床にはすでに合わなくなったことに気がついた。と言うのは薬品は国内でも絶えず開発され、国外からも輸入されるにつれて、薬の種類がますます雑多となり、真偽も鑑別しにくいし、名前と実物が合わなくなっていたからである。それで蘇頌は同時の宋政府に建言を出した。嘉祐三年（公元一〇五八年）に宋政府は全国各地に次のような命令を出した。それは①当地の生産する藥物の図形、実物の標本を集めて、それに花が咲く時間、実がなる時間及び採る季節、効能などについて文字で注明すること。②輸人品であれば原産地をはっきり調べ、見本を選択し、首都へ送るようというものであった。この全国規模の藥物の大調査は、世界薬学史上の一つの

めざましい事業であった。蘇頌は集められた資料の中から精華を取って、糟粕を捨てて、嘉祐六年（一〇六一）に『図経本草』と言う本を整理、編集して、翌年に刊行した。

『図経本草』は『本草図経』とも言い、図譜中心の本草著作である。全二〇巻で、目録が一巻、七八〇種類の薬を記載し、九三三図の薬図が掲載されている。本の構成は上に図があり下に文章を配置し、一つの薬に一図または数図を配した。この本は主に薬物の原産地、形態、鑑別と製法等について詳しく述べたものである。それには宋時代の大量の民間における薬についての鑑別や応用の経験を集めて、多くの単方、驗方を書き入れられていた。同時に国外の薬物に関する知識をも取り入れていた。この本は宋時代の本草学の発展の状況と同時の全国における薬を応用する実情をすべて反映した本といえる。その外に又、約二〇〇種類の經典文献を引用している。故に、この本は宋時代薬学史と中国医学文献の研究には、非常に参考価値がある本であると言える。原本は宋時代に小字本があったが後に散逸した。しかし、その内容は

『証類本草』に見ることができ。

『図経本草』の刊行には後世の本草図譜の作製に強く影響を与え、中国本草学発展史上に画期的時代の意義があると考える。イギリスの近代の有名な生化学家、東洋学者の李約瑟 (Joseph Needham) は、この本を「木刻標本の説明図が附いている薬学史上の傑作である」と述べ、また『本草綱目』の作者である李時珍も「考証詳明だし、發揮も上手だ」と高く評価している。医薬学史上に大きな貢献を残した科学者である蘇頌を記念するために、一九九三年に中国の長春中医学院の中に蘇頌国際中医門診部が建てられた。蘇頌の科学思想と方法論はまだ強く現在の中国の医界に影響していることをつけ加えておきたい。末筆ながら本稿の作製に際してご指導をいただいた酒井シヅ教授先生に感謝を申し上げます。

（順天堂大学医学部史学研究室・
中国長春中医学院医史教研室）